

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2022年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	法学研究科	法学政治学専攻
研究代表者 (2023年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年	ラウシュ 魁	
指導教員	所属部局・職名	氏名	
	法学部・教授	川崎 修	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	大衆の時代再検討-----大衆社会論の政治思想史		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2023年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名	
	法学研究科・法学政治学専攻・博士課程後期課程・2年	ラウシュ 魁	
研究期間	2022 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、研究題目を「大衆の時代再検討-----大衆社会論の政治思想史」と題し、この題目が示す通り、20世紀において非常に大きな影響力を持った「大衆社会論」について、思想的に解明することを目的としている。研究目的としては、「大衆社会論」の出現、流行、そして衰退の歴史を思想的に解明することである。具体的には、「大衆」という人間の集合表象に着目し、それぞれの論者による「大衆」の記述を丁寧に分析することによって、その議論の背景となる時代診断を理解することである。次項に後述するように、2022年度はアメリカにおける議論に着目し、ハンナ・アーレントとデイヴィッド・リースマンを中心に考察した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 大衆社会 (論) } { ハンナ・アーレント } { デイヴィッド・リースマン }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

上記の研究課題において、2022 年度に取り組んだのは、主として、①大衆社会論全体の総括、②ハンナ・アーレントにおけるアメリカという文脈の精査、およびアーレントにおける大衆社会論を検討する上での留意すべき点の確認、そして、③デイヴィッド・リースマンにおける大衆社会論の考察である。以下、研究成果として上記①から③まで、それぞれ具体的な成果を示す。

①大衆社会論全体の総括：

本研究課題の内、上記のテーマに取り組んだのは主に 2022 年度春学期である。研究課題の題目と同様に、このテーマもその表題が示す通り、大衆社会論の全体の総括を行い、それによって今後の研究の方向性を具体的に定める事を目的としている。

研究成果としては、大衆社会論の総括的な研究として知られる W.コーンハウザーの『大衆社会の政治』や、大衆社会論への死亡宣告として位置付けられる D.ベルの『イデオロギーの終焉』、また懐古的な視点から大衆社会論の展開や様々なテーマを包括的に論じた S.ヒネールによる『大衆社会』をはじめとした文献、また実際に 1950 年代頃の一次文献等の講読により、大衆社会論の議論全体の輪郭をつかめたと考えている。その内容に関しては、2022 年度の研究科内の研究報告会にて報告を行った(立教大学 大学院 法学研究科 政治学総合演習)。そこで質疑応答などの議論を経て、今後の研究の方向性を概ね定めることができたと考えている。なお、上記報告内容に関しては、今後さらなるブラッシュアップを経て、研究ノート等の形で公開したいとも考えている。

②ハンナ・アーレントにおけるアメリカという文脈の精査/アーレントにおける大衆社会論を検討する上での留意点の確認：

本研究課題の内、上記のテーマに関しては、2021 年度より引き続き検討してきたテーマである。2021 年度に、上記のテーマの検討の一環として、リチャード・H・キングによる 2015 年の著書『アーレントとアメリカ』の書評論文を 4,000 字程度執筆した。しかし、その書評論文は、研究科の事情により、2021 年度中に掲載することは出来なかった。そこで、2022 年度において、上記文献の書評論文を、4,000 字から 8,000 字程度まで加筆するなどさらに内容をブラッシュアップすると同時に、後半に特にアーレントにおける大衆社会論について主題的に論じた箇所をも含め、20,000 字程度の研究ノートとして掲載した。詳細は以下の通りである。

○ 研究ノート：「アーレント思想における「アメリカ的」文脈——Richard H. King, *Arendt and America* (The University of Chicago Press, 2015) を読む」

上記研究ノートは立教大学大学院法学研究科が刊行している院生紀要『立教大学大学院 法学研究』の第 52 号(2022 年 9 月発行)に掲載された。同紀要雑誌は、国会図書館をも含めた全国 100 以上の大学もしくは研究機関に送付されている。掲載にあたっては、指導教授及び副指導教授の確認と承認を必須としている。

内容としては、上記の通り、2015 年に出版されたリチャード・H・キングによる著書『アーレントとアメリカ』の書評論文が中心となっている。同書は、その表題が示す通り、20 世紀を代表する政治理論家の一人として知られているハンナ・アーレント(Hannah Arendt: 1906-1975)と、アメリカとの関係、および彼女の思想におけるアメリカという文脈について分析した研究書である。

ハンナ・アーレントとは、周知の通り、ユダヤ系ドイツ人の出自であり、1933 年にドイツにおいてナチス政権が成立すると、フランスを経由してアメリカに亡命することとなる。その後『全体主義の起原』や『人間の条件』などの著作によって世界的に知られる著名な政治理論家として活躍する彼女だが、同時代の同様の境遇のユダヤ系知識人とは異なり、彼女はその後生涯を通じ、アメリカに留まり、そこで言論活動を続けた。そのような背景を持つ彼女にとって、上記文献の著者キングも指摘する通り、アメリカという要素、あるいは文脈は彼女の思想形成に影響を与えたということは間違いない。事実、著者のキングによると、アーレントの思想においてアメリカという要素は、唯一の要点とまでは言えないが、それらを加味することなしに、彼女の思想の全体像を理解することはできない(King, Richard, H., *Arendt and America*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 2015, p.4.、ラウシュ魁、「アーレント思想における「アメリカ的」文脈——Richard H. King, *Arendt and America* (The University of Chicago Press, 2015) を読む」、『立教大学大学院 法学研究』、第 52 号、2022 年、pp.43-67、p.44.)。そこで、アーレントとアメリカという要素の関係性を論じた同書をテキストとし、アーレントにおけるアメリカ的文脈について考察する書評論文を執筆した。

研究成果の概要 (つづき)

まず、書評部分に関する概略としては、著者キングによる本書の議論を各章ごとに要約し、場合によってそれぞれの章の議論に対して問題提起を行った。その上で、書評部分の末尾には、キングの議論全体に対する問題提起を行った。キングは同書で、上記のような経歴を持ったアーレントが、ドイツ的な思想家ではなく果たしてアメリカ的な思想家になったのかという問いを立てて議論を始めている (King, op cit, p.3、ラウシュ、前掲論文、p.45.)。このような問題設定の上で、その実際の議論の内容としては、アーレントによる個別的な議論を、それぞれその時々アメリカという文脈に位置付けて考察するものとなっている。すなわち、アメリカにおける状況や、アメリカにおける知識人による批評や受容、そして、彼らとの議論や論争を検討するというものだ。この作業はアーレントの思想やその含意を理解する上で重要な作業であることは間違いない。しかし、キングがその時々「アメリカ的」な文脈として措定したものが、果たして「アメリカ的」と言えるのかどうかという点に関しては疑問が残る。あるいは、この疑問は、「アメリカ的なもの」というのは果たして措定され得るのかという問いにもつながる。これらの問いを端的に言い換えると、キングによる議論は、アーレントと「アメリカ的なもの」との距離感を測る作業と言えるが、そのアーレントの思想を論じる際の参照軸としてキングによって設定された「アメリカ的なもの」とは、果たして一貫性のある参照軸として措定され得るものなのかという問いである。この問いは、広義には 20 世紀思想史における「アメリカ」という要素を考察する上でも重要であると考えられる。また狭義にはアーレントの思想に関する研究においても、アーレントに大きな影響を及ぼしたと考えられる「アメリカ」とは一体何であったのかを考える足掛かりにもなると確信している。

後半部分の、アーレントにおける大衆社会論について主題的に論じた箇所では、キングによるアーレントの大衆社会論に関する議論を丁寧に要約しつつ、その問題点を指摘した。アーレントの大衆社会論に関するキングの議論は、アーレント自身がそのテーマについて様々な著書で言及し、彼女自身においても重大問題であったにも拘らずあまり一貫性があるという意味で確定的な記述をしていない中で、それを二つの議論に大別したという点で大きな貢献をしている。それらは、『全体主義の起原』において、主にナチズムの出現を説明する際に論じられていた大衆社会論と、『全体主義の起原』以降の著作において、主に当時のアメリカについての記述に関して論じられた大衆社会論である。キングはこの二つの区別を指摘した上で、とはいえアーレント自身はそれらについて練り上げることはせず、後に『人間の条件』や『革命について』で論じられることになる「社会的なるもの」に組み込まれてしまったと結論する。しかし拙稿では、以上のようなキングの議論に対し、主に二点の問題提起を行った。一点目は、アーレントの大衆社会論における最重要概念である「見捨てられている状態(英: loneliness / 独: Verlassenheit)」についてキングは、大衆社会論との関連ではあまり詳細に論じていないという点である。二点目は、前述のアーレントの大衆社会論が「社会的なるもの」に組み込まれてしまったという結論に対して、その「社会的なるもの」に関しては一点目と同様にあまり詳細に論じていないという点である。以上の問題点の指摘により、今後本研究課題代表者がアーレントの大衆社会論を扱う上での留意点を確認することができたと考えている。また、書評部分で提起した問題点である「アメリカ的なもの」の措定に関する点も、アーレントの大衆社会論を考察する上でも、重要な足掛かりなると確信している。

③ デイヴィッド・リースマンにおける大衆社会論の考察:

本研究課題の内、上記のテーマに取り組んだのは主に 2022 年度秋学期である。デイヴィッド・リースマン (David Riesman: 1909-2002) は 20 世紀アメリカにおける著名な社会学者で、『孤独な群衆』の著者として知られている。

「内部指向型(inner-directed)」や「他人指向型(other-directed)」など、そこでの社会的性格の類型に関する議論は、近年においても参照されるほどの影響力がある。しかし、『孤独な群衆』の主要な関心の一つは「政治」にあったということは顧みられることが少ない。また、リースマンによる「政治」のイメージがどのようなもので、『孤独な群衆』においては、「政治」に関して、何を、どのように論じたのかという点にはあまり注意が向けられていない。そこで、リースマンにおける政治に関する議論がどのようなものだったのかについて、彼自身の記述の丁寧な分析を通じて考察を行った。その結果として、C.ライト・ミルズなどとは異なり、大衆社会を多面的に論じ、ある種の楽観的な観点を抱いていたと従来は理解されてきたリースマンにおいても、「政治」において「大衆社会」をめぐる懸念点が記述されていたということを結論として論じるに至った。本論文に関しては、今年度中の発表には至らなかったが、来年度中に発表することを目指している。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

①ラウシュ魁、「研究ノート：アレント思想における「アメリカ的」文脈----Richard H. King, *Arendt and America* (The University of Chicago Press, 2015) を読む」、『立教大学大学院 法学研究』、第 52 号、2022 年、pp.43-67. (総 26 ページ)